様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 10 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2008
課題番号：19720115
研究課題名（和文）　英語の複合動詞の種類とその特性について

研究課題名（英文）　English Compound Verbs: Their Types and Properties

研究代表者
長野　明子（NAGANO AKIKO）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・ 助教
研究者番号：90407883

研究成果の概要：
英語には、N+V (*to baby-sit*), A+V (*to rough-ride*), V+V (*to dive-bomb*), P+V (*to back-cut*), V+A (*to bleach-white*)のように、一見すると複合（compounding, 語と語を連結して新しい語を作る操作）によって作られたように見える動詞が存在するが、屈折、意味をはじめとするいくつかの文法上の特徴から、これらのいずれの型も真の複合語ではなく、何らかの他の文法形式（例えば N+V 型, A+V 型なら対応する複合名詞、複合形容詞）から逆形成、転換、倒置、語彙化などの操作によって派生された動詞であるいえる。よって、英語では、構成要素の範疇に関わらず、体系的に複合動詞を作ることができないと結論できる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 19 年度	800,000	0	800,000
平成 20 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,300,000	150,000	1,450,000

研究分野：言語学・英語学・形態論
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：英語の語形成、複合動詞、屈折、語彙化、句動詞、コーパス調査

１．研究開始当初の背景

英語の複合動詞（以下、二つの自由形態素から構成される動詞を、慣例に従い、「複合動詞」と呼ぶ）は、複合名詞や複合形容詞に比べると、本格的な議論の対象として取り上げられることが少なく、本研究課題の申請時において、少なくとも二つの問題が未解決のままに残っていた。第一の問題は、複合動詞の生成方法（文字通りの複合―語と語の連結―によって生成されるのか、あるいは、複合以外の別の方法によって生成されるのか、という問題）である。第二の問題は、複合動詞の屈折に関するもの（複合動詞の屈折にはどのような一般化が可能で、それはどのように説明されるのか、という問題）である。

筆者は、博士論文（Akiko Nagano (2008) *Conversion and Back-Formation in English: Toward a Morpheme-Based Theory of Morphology*, Kaitakusha, Tokyo）において

英語の転換と逆形成を取り上げ、英語には生産的な動詞複合は存在しないという伝統的見方のもと、複合動詞もその分析の対象として扱ったが、上記二つの問題に詳しく立ち入る余裕はなかった。

２．研究の目的

１．で述べた背景を受け、本研究では、複合動詞に焦点をあて、１．で述べた二つの問題を解明することを研究の目的として設定することにした。より具体的には、上記二つの問題点を、以下三つの観点から明らかにすることを研究目標とした。第一に、理論的に可能な複合動詞の生成方法を整理し、そこから複合動詞のふるまいに関してどのような予測が得られるかを検証する。第二に、複合動詞の屈折特性を、大型コーパスを用いて体系的に調査し、先行研究よりも精緻な一般化が得られないかを検証する。第三に、理論からの予測と事実（特に屈折に関する事実）をつきあわせることにより、複合動詞の生成方法（種類わけ）の問題に解決を与える。

３．研究の方法

平成１９年度

(1) 英語の複合動詞に関する先行研究を確認する。特に、複合動詞の派生方法と屈折に関する主張に注目しながら整理した。

(2) 英語以外の言語の複合動詞に関する先行研究をできるだけ多く読み、複合動詞を記述する上で注目すべき点を確認した。他言語の複合動詞と比較することにより、英語の複合動詞の特性を検証した。

(3) (1)と(2) の結果をもとに、文献から得られる情報のレベルで、英語の複合動詞は何種類に分けられるのか（それとも下位分類は必要ないのか)、その種類分けは派生方法と相関しているのか、を検討した。筆者が博士論文で明らかにした、転換動詞・逆形成動詞一般の特性も参照した。

(4) 筆者は、博士論文のために逆形成によって派生された複合動詞のリストを既に作成している。新語辞書等を用いてそのリストの補充を図ると共に、転換による複合動詞及び対応する複合名詞・複合形容詞のない複合動詞に関しても同種のリストを作成した。

(5) (3)の結果を（4）のリストを用いてコーパスで検証した。複合動詞がコーパス上で（特に文献で注目されている特性に関して）どのような振舞いをするのかを調べ、その振舞いが派生方法と相関するかを検証した。コーパスは、The British National Corpus (1 億語)と Wordbanks Online (5, 600 万語)を使用した。

(6) 関連する学会・研究会に出席し、情報を収集した。形態論やレキシコンを専門にしている研究者と意見交換を行った。

平成20年度

(1) 英語の動詞屈折に関する文献を読み、内容を整理した。特に、心理言語学的実験を行っている研究の実験結果を中心に、規則活用と不規則活用の質的区別の有無、過去形屈折における頻度の影響、デフォルト規則の存在、「類推」の働きに関し、判明していることを整理した。

(2) Kim et al. (1991, 1994) は、一連の実験をもとに、転換動詞の屈折がその意味ではなく内部構造によって決定されるという結論を出している。彼らのその後の研究を追い、派生プロセスが屈折にどのような影響を与えるかを検討した。

(3) 平成 19 年度に整備したリストをもとに、複合動詞の屈折に関するデータを大型コーパスから収集した。コーパスは前年度と同じ The British National Corpus と Wordbanks Online を使用した。

(4) コーパスから得られたデータをもとに、複合動詞の屈折に関して先行研究より精密な一般化が得られないかを検証した。「分詞形の優勢」は（どの程度まで）正しいのか、過去分詞形と現在分詞形で差はないのか、定形の屈折が許される場合現在形と過去形では使用頻度に差があるのか、過去形を許す複合動詞は規則活用と不規則活用のいずれを使うのか、複合動詞全体の頻度の影響はどうか、といった疑問点の検証を通し、事実の一般化を目指した。

(5) コーパスから得られたデータを複合動詞の派生方法と主要部動詞の特性（屈折特性、頻度など）のそれぞれの観点から整理し、屈折特性の決定において、いずれの影響が大きいかを吟味した。事実の検証に際しては、(1-2)の先行研究から得られた知見を参照しながら進めた。

(6) 複合動詞の屈折に関する事実をまとめ、関連する学会で発表した。

(7) 本研究の成果の取りまとめを行い、報告書を作成し印刷した。

４．研究成果

本研究の最大の成果は、英語では、いかなる範疇の組み合わせであれ、動詞複合は不可能であり、一見「複合動詞」に見える事例は何らかの別の形式から派生されたものである、ということを明らかにした点である。

複合とは語と語を連結する操作であるから、複合動詞となりうる語彙範疇の組み合わせは以下の七通りである。

(1) N+V, A+V, P+V, V+V, V+N, V+A, V+P (P= Particle)

英語の場合、これらのうち V+N を除く全ての組み合わせが、（動詞句としてではなく）語彙性をもった動詞語彙として存在する。以下の例を参照。

(2) a. N+V to baby-sit, to body-check, to brainwash, to joyride, to sightsee
b. A+V to blindfold, to broadcast, to cold-call, to shortcut, to rough-ride
c. P+V to back-cut, to downgrade, to download, to off-drive, to upshift
d. V+V to crash-land, to dive-bomb, to drink-drive, to freeze-dry
e. V+A to bleach-white, to wipe-clean, to push-open, to slam-shut
f. V+ P to break down, to cut back, to pull off, to push up, to put away

N+V、A+V 型の動詞については、Marchand (1969), Adams (1973, 2001)などで既に複合動詞分析が否定されており、転換か逆形成で派生されたものであるとの分析がなされてきた。島村(1990: Chap.5, 6)では、N+V 型動詞の特に逆形成で作られた動詞について、意味・項構造・屈折などに基づく分析がなされた。しかし、同時に、Emonds (2000), Jackson and Amvela (2000), Baker (2003), Ackema and Neeleman (2004) のように、英語は体系的に N+V、A+V 型動詞を複合で生成しうるとする分析も依然としてなされている。本研究内の長野（2007）, Nagano (to appear), 長野(to appear)ではまず、N+V、A+V 型の動詞が、その屈折特性からいって、複合によって作られた均質のカテゴリーではなく、転換か逆形成によって作られた混合的なカテゴリーであることを実証した。具体的には、右側 V が不規則動詞であるような N+V, A+V 型の動詞には、一貫して規則活用をするものと不規則活用と規則活用の間で屈折が「揺れる」ものとがあることという事実がコーパス調査で観察された。この事実は直接複合分析では説明できない。なぜなら、真の複合語ならば、右側主要部の特性に従って、必ず不規則活用するはずだからである。一方、対応する複合名詞・形容詞から転換もしくは逆形成によって派生されたものを分析すれば、上記の屈折の事実を転換、逆形成それぞれの一般特性（特に、アウトプット動詞の主要部の有無）から説明することが可能になる。

P+V 型の動詞については、Marchand (1969)は OE 以来英語で許された唯一の複合動詞の型であるとする。Kastovsky (1992)、Burnley (1992)、Nevalainen (1999)もそれぞれ OE、ME、EModE の「複合動詞」に関し、真に複合で作られたとみなせるのは P+V 型のみと述べている。ただし、これらの文献の記述を総合すると、P+V 型の複合動詞においては、時代が下がるにつれて V+P 型のいわゆる phrasal verbs の方が優勢になるか、*out*-V、*over*-V、*under*-V のように P が本来の「場所」の意味を失ってより抽象的な意味を表す接頭辞（に近い要素）に発達するか、いずれかの変化をこうむり、P+V 型の複合自体は生産性を失っていったようである。よって、PE の P+V 型の動詞については、*out*-V のような接頭辞付加動詞か、もしくは Berg (1998)のように V+P 型からの「倒置」(inversion)によって作られた動詞とするのが妥当であろう。本研究内 Nagano (to appear)は、PE の P+V 型の動詞も（N+V, A+V 型と同様）右側の動詞から予測できない屈折特性を持つことを明らかにし、複合によって作られたとはみなせないと結論した。

V+V 型の動詞は、Adams (2001)が指摘するように、類推によって、もしくは、「簡潔に述べる必要性」によって新語が作られることはあるが、体系的な操作としての生産性は持っていない。本研究内 Nagano (to appear)では、いくつか存在する既存の V-V 型動詞の例は、二つの V がほぼ同時に起こるという意味関係にあることから、「並列複合語」（dvandva compound）の一種ではないかと提案した。Lieber (1992)、Plag (2003)にも同様の分析が見られる。英語においては V-V だけでなく N-N、A-A など並列複合は一般に生産性が低い（cf. Ralli 2008）。右側 V が主要部となるような V-V 型動詞 ― 日本語や韓国語では非常に生産的な複合動詞の型（由本 2005 など）― は英語では不可能であるが、その理由については現時点では筆者には不明である。

本研究内の長野・島田 (2008)では、これまでほとんど議論されてこなかった、V+A 型の「複合動詞」を検証した。V+A 型動詞の中には *to bleach white* のように生産性が低く、対応する分離形（e.g. *to bleach something white*）にはない固有の意味をもつ例と、*to push open* のように生産性が高く、対応する分離形（e.g. *to push something open*）とほぼ同じ意味を表す例とがある。Taniwaki (2006)がこれらを区別せず「レキシコンにおける複合によってつくられる動詞」と主張するのに対し、長野・島田(2008)では、前者の

類は動詞句（対応する結果構文）からの語彙化によってできる動詞、後者の類は V+P 型動詞（いわゆる phrasal verbs）の一種と分析するのが妥当であることを示した。つまり、この型の動詞も真の複合語ではなく、別の形式からの派生形であるといえる。

生産的な V+A 型動詞が V+P 型動詞の一種であるとして、次に考えるべき問題はそれでは V+P 型動詞、いわゆる phrasal verbs の隣接形が複合語であるかといえるかいう点である。長野・島田(2008)ではこの問題の詳細に立ち入ることはできなかったが、英語の V+P 型動詞は必ず対応する V---P 型の分離形を持ち、その交替が統語、音韻、フォーカスなど様々なレベルの要因によって左右されること（e.g. Bolinger（1971), Jackendoff (2002)）を考えると、V+P 型が形態論での純粋な複合によって作られるとは考えにくい。主要部の位置も問題となる（Adams（2001))。むしろ、長野・島田（2008）で示唆したように、その語彙性は通常の語の語彙性とは別の仕組みで保証されていると考えるべきではないかと思われる。上記でみたような英語での「複合動詞」一般の非生産性を考えても、Farrell (2005)のように V+P 型動詞を「語彙的複合」で生成する分析には無理があるように思われる。

以上をまとめると、英語に存在するとされるいずれの型の「複合動詞」も、実際には（右側主要部の規則に従った）複合によって作られるものではないと結論できる。英語の「複合動詞」の種類としては、逆形成で派生されるもの、転換で派生されるもの、倒置で派生されるもの、並列複合か類推で作られたもの、動詞句の語彙化によって生じたもの、phrasal verb の隣接形であるものがある。これらの「複合動詞」全体に共通する特性はほとんどなく、それぞれの派生法に従った特性を示す。例えば本研究内の Nagano (2008)は、転換の一般特性を論じたものであり、転換でつくられた複合動詞の特性はこの枠組みで説明される。

本研究の今後の展望と課題は以下二点である。第一に、上で述べた結論を受けて、それではなぜ英語では動詞複合が不可能なのかという理由を検証する必要がある。上掲の Marchand（1969）、Kastovskty（1992）、Burnley (1992)、Nevalainen (1999)、および米倉(2006)の記述を読むと、OE 以来英語には動詞複合が一貫して、体系的に欠けていたと考えてよいと思われる。句と語の基本語順の違い（島村(1990), Nevalainen (1999)）、屈折の不確かさ、複合による編入要素の脱フォーカス（Adams (2001)）など、いくつかの理由が既に先行研究で指摘されているが、詳細な分析はまだなされていないといってよいだろう。また、Kastovsky (1986)は、逆形成と転換による複合動詞の例が増加するにつれ、類推に基づく複合動詞形成が促進され、いずれは英語でも真の動詞複合（“genuine verbal compounding”）が発達するであろうとの予測をしている。特に逆形成による複合動詞は 20 世紀後半から生産性が急激に伸びていること（Haspelmath (2002)）を考えると、この予測の真偽、及び、それと上記英語の特性との相互作用について、今後観察と検証を続けていかねばならないだろう。

第二に、英語とそれ以外のゲルマン諸語の細かな差異についても今後の検証課題である。Marchand (1969)によると（P+V 型を除く）動詞複合は英語だけでなくゲルマン諸語一般において欠けているとされる。これは大きな一般化としては妥当であろうが、それぞれの言語で「複合動詞」とされる動詞群をざっと比較するだけでも、種類、派生法、特性などにおいて少なからず違いがあることがわかる。例えば、英語の「複合動詞」には(2)に挙げた六つの型があり、(1)に挙げた理論的に可能な型のうち V+N 型の動詞だけはなぜか存在しない。しかし、Booij（1992)によるとオランダ語にはこの型の「複合動詞」も存在するそうである。また、上述の通り英語の N+V 型動詞は基本的に逆形成か転換でしか生成されないのに対し、（系統的にはゲルマン諸語の中でも英語に近いとされる）フリジア語では N+V 型動詞、特に N が V の内項にあたる例が複合によって生産的に生成される（Ackema（1999))といった大きな違いもある。V2 現象の有無のような統語的な違いも含め、他のゲルマン諸語との違いを検証することで、第一の検証課題にもなんらかの示唆が得られるのではないかと考える。

従来の研究が、理論的な理由のみに基づいて複合動詞の位置づけ（派生方法の決定）を行ってきたのに対し、本研究は体系的な事実調査に基づいてそれを行ったという点で大きく異なっている。より広く見ると、「複合動詞」という、英語の形態論において空白のままにされてきた部分に精緻な一般化を与えたという重要性もある。本研究の調査により、いわゆる複合動詞には逆形成、転換、並列複合、語彙化、などいくつかの下位タイプがあることが判明したので、従来の研究の多くは、伝統文法に従うものであれ、生成文法流のものであれ、理論の改訂をせまられることになるであろう。特に、英語に関しては、複合動詞を複合名詞や複合形容詞と区別せ

ずに扱うという立場はとれないということが明らかになったので、「複合」という形態操作に範疇による制限を与えなければならないことになる。

参考文献

Ackema, P. (1999) "The Nonuniform Structure of Dutch N-V Compounds," *Yearbook of Morphology 1998*, ed. by Geert B. and J. van Marle, 127-158, Kluwer.

Ackema, P. and A. Neeleman (2004) *Beyond Morphology*, Oxford UP, Oxford.

Adams, V. (2001) *Complex Words in English*, Pearson, Harlow.

Baker, M. (2003) *Lexical Categories,* Cambridge UP, Cambridge.

Berg, T. (1998) "The (In)compatibility of Morpheme Orders and Lexical Categories and Its Historical Implications," *English Language and Linguistics* 2, 245-262.

Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*, Harvard UP, Cambridge, MA.

Booij, G. (1992) "Compounding in Dutch," *Rivista di Linguistica* 4, 37-59.

Burnley, D. (1992) "Lexis and Semantics," *The Cambridge History of the English Language*, ed. by N. Blake, 409-499, Cambridge UP, Cambridge.

Di Sciullo, A.M. and E. Williams (1987) *On the Definition of Word, MIT Press*, Cambridge, MA.

Emonds, J. E. (2000) *Lexicon and Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Farrell, P. (2005) "English Verb-Preposition Constructions: Constituency and Order," *Language* 81, 96-137.

Haspelmath, M. (2002) *Understanding Morphology*, Arnold, London.

Jackendoff, R. (2002) "English Particle Constructions, the Lexicon, and the Autonomy of Syntax," *Verb-Particle Explorations*, ed. by R. Dehé et al., 67-94, Mouton de Gruyter, Berlin.

Jackson, H. and E. Z. Amvela (2000) *Words, Meanings, and Vocabulary,* Cassell, London.

Kastovsky, D. (1992) "Semantics and Vocabulary," *The Cambridge History of the English Language*, ed. by R. M. Hogg, 290-408, Cambridge UP, Cambridge.

Kastovsky, D. (1986) "Diachronic Word-Formation in a Functional Perspective," *Linguistics across Historical and Geographical Boundaries*, ed. by D. Kastovsky and A. Szwedek, 409-421, Mouton de Gruyter, Berlin.

Lieber, R. (1992) "Compounding in English," *Rivista di Linguistica* 4, 79-96.

Marchand, H. (1969) *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*, C.H.Beck, Munich.

Nagano, A. (to appear) "Compound Verbs in English: Their Subclasses and Inflectional Properties," *JELS* 26.

長野明子 (to appear)「英語の語の仕組み：屈折と複合」『筑波英語教育』第 30 号.

Nagano, A. (2008) "Categorial Status of Conversion and the Process of Relisting," *English Linguistics* 25, 369-398.

長野明子 (2007)「複合動詞の派生法と屈折」『英語青年』 2007 年 10 月号, 23-26.

長野明子・島田雅晴 (2008)「英語の語形成と V-A 型の結果表現」日本言語学会第 137 回年次大会研究発表, 金沢大学.

Nevalainen, T. (1999) "Early Modern English Lexis and Semantics," *The Cambridge History of the English Language*, ed. by R. Lass, 332-458, Cambridge UP, Cambridge.

Plag, I. (2003) *Word-Formation in English*, Cambridge UP, Cambridge.

Ralli, A. (2008) "Dvandva [VV] Compounds: A Linguistic Link between Greece and East/South-East Asia," paper presented at the symposium of the 136th Conference of the Linguistic Society of Japan.

島村礼子 (1990)『英語の語形成とその生産性』、リーベル出版、東京.

Taniwaki, Y. (2006) "Resultative Verb-Adjective Combinations as Lexical Compounds," *Lexicon Forum* 2, ed. by T. Kageyama, 251-280, Hituzi Shobo, Tokyo.

由本陽子(2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』、ひつじ書房、東京。

米倉綽 (2006)「古英語、中英語、初期近代英語における語形成」、米倉綽 (編)『英語の語形成：通時的・共時的研究の現状と課題』、2-207、英潮社、東京.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① Nagano, Akiko (to appear) "Compound Verbs in English: Their Subclasses and Inflectional Properties," *JELS* 26, non-refereed paper.
② 長野明子 (2009) 「英語の語の仕組み：屈折と複合」『筑波英語教育』第 30 号, 124-129, 査読無し.
③ Nagano, Akiko (2008) "Categorial Status of Conversion and the Process of Relisting," *English Linguistics* 25, 369-398, refereed paper.
④ 長野明子 (2007) 「複合動詞の派生法と屈折」『英語青年』2007 年 10 月号, 23-26、査読無し.

〔学会発表〕（計４件）

① 長野明子・島田雅晴 「英語の語形成と V-A 型の結果表現」日本言語学会第 137 回年次大会研究発表, 2008 年 11 月 29 日, 金沢大学.
② 長野明子「英語の複合動詞の種類とその屈折特性について」日本英語学会第 26 回年次大会研究発表, 2008 年 11 月 15 日, 筑波大学.
③ 長野明子「英語の語の仕組み：屈折と派生」筑波英語教育学会第 28 回年次大会シンポジウム「わかりやすい英文法の話」, 2008 年 6 月 21 日, 筑波大学.
④ Nagano, Akiko "Subject Compounding and a Functional Change of the Derivational Suffix *-ing* in the History of English," *the 5th Studies in the History of the English Language*, Paper Presentation, October 5, 2007, University of Georgia, U.S.A.

〔図書〕（計１件）

① Nagano, Akiko (to appear) "Subject Compounding and a Functional Change of the Derivational Suffix *-ing* in the History of English," *Selected Papers from SHEL5* (a working title), ed. by Bill Kretzschmar et al., Mouton de Gruyter, Amsterdam.

〔その他〕
長野明子(2009) 『英語の複合動詞の種類とその特性について』 平成 19・20 年度科学研究費補助金（若手研究 B、課題番号 19720115）研究成果冊子報告書.

６．研究組織
(1)研究代表者
長野　明子（NAGANO AKIKO）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・助教
研究者番号：90407883